

Saul Bellowの*A Theft*における様々な喪失について

大工原ちなみ

1989年に発表された*A Theft*¹は、長すぎるという理由で二つの出版社 (*The New Yorker & Vanity Fair*) から出版を断られている²。一部をカットするようにと要求した出版社もあったが、Bellowとしては、それは不本意であり、ヨーロッパ文学においてはnovellaが由緒ある文学形式として確立していることを強調し、小説の長さの正当性を訴えた。結局Bellowは作品をカットするよりも、「文学的素養がある学位所持者50万人」³に期待を寄せながら、多くの読者を獲得することを求めて、通常なら最初はハードカバー版で出版するところを、いきなりペングインのペーパーバックで出版する道を選んだのであった。

しかし実際に出版されると、25万部のうちの10万部しか売れなかった上に、Bellowのこれまでの作品とは異なり、目立つ批評もなされなかった。Atalasによれば、Bellow自身、作品がショウウィンドーの目立つところに飾られなかったショックを打ち明けているという。現代では、作家は“solitary lives” (CSB, 240) を強いられ、作家を取り巻く出版状況が厳しいものになっていることは認めてはいるものの、やはりBellowとしてはノーベル賞受賞作家としてのプライドがあったのであろう。Bellowは自分の価値を確かめるために、*Mr. Sammler's Planet*等の旧作品のゲラを競売にかけたが、期待していたほどの値はつかず、しかもBellow自身は預かり知らぬことではあったが、それを競り落としたのは、Bellowのことを案じた友人であったという。以上のような状況においては、Bellowは自分の名声が、失われつつあることを意識せざるを得なかったのではないだろうか。

この作品のタイトルである“A Theft”は一つの盗みということであり、それはこの作品の中で描かれている唯一の盗みである、Frederick VigneronによるClara Veldeのエメラルドの指輪の窃盗を差していることは自明のことである。しかし、Cronin氏は、この作品中にはたくさん“thief”が登場することを指摘している。Frederickはむろんのこと、指輪を発見した際、補償金をあらかた使ってしまうており返済の当てがなかったため、保険会社には通知せず、結果的には保険金をだまし取った形になっているClara、Claraを始めたくさんの人々とりわけ女性達の“human Heart”を盗み続けるIthiel Regler等である。多数の盗人が登場し、種々の盗みが行なわれるこの作品の中で、様々な喪失が語られているのも決して偶然のことではないであろう。初めにBellowの作家としての名声の喪失について述べたが、他にもこの作品の中では、中心的エピソードである指輪の喪失を始め様々な喪失が描かれているのである。この

論文では、*A Theft*に描かれている様々な喪失について考察していきたい。

1 男性ヒーローの喪失

この作品は、Claraという女性が主人公となっている。もちろんClaraが愛してやまないIthiel⁴という魅力的ですべてに秀でており、これまでのBellowの多くの作品のヒーローがそうであったように、ユダヤ系の男性も主要人物として登場するが、最も重要な役を担っているのは、ヒロインなのである。このBellowにとっては例外的である、女性が主人公という特異性は、多くの批評家達によっても指摘されている。AtlasらはBellowが年をとって“mellower”（柔らか・円熟）になったから、女性の視点から書いたのであろうと指摘し、Pifer氏は、Claraがこれまでのヒロインとは異なり生き生きと描かれていて、これまでのような“male fantasy”の抽出物ではないとしている。彼らの言に従うなら、Bellowは70代半ばの円熟期を迎えて始めて、女性の視点から生き生きとした女性を描けるようになったと言えよう。

実はBellowは1957年にも、女性を主人公とする“Leaving the Yellow House”という長めの短編を発表している。ヒロインであるHattieは自動車事故を起こしたことで、年老いて一人では生きていけない無力感にさいなまれ、身近に迫りつつある死を実感するものの、決して死を受け入れることができず、財産を自分に贈与する遺書をしたためる。彼女は19世紀末に花嫁学校を出て、パリでオルガンを学んでおり、当時の女性としては最高の教養を身につけている。だが現在は、「音符とフライパンの区別もできず」(7) トランプゲームでかんしゃくを起こし、飲酒運転をする知性のかけらも感じられない老女となっている。現在はカリフォルニア南部の砂漠地帯に住んでいるが、彼女が隣人と考えているのは、牧場主のPace夫妻とRolfe夫妻のみで、その他の貧しい保線工夫やカウボーイ、メキシコ人インディアン、黒人といったマイノリティは、隣人の数に入れていない人種差別主義的な人物でもある。

Bellowの作品の中で唯一の女性主人公であるClaraとHattieを比較してみる時、共通点が浮かび上がってくる。それは両者共その時代としては最高の教養を身につけながら、田舎者扱いされた上に、知性的な面が否定されている点である。Claraもハーバードやコロンビア大学で学び、現在はファッション系の会社の重役を務めているほどの人物でありながら、少なくとも表面的には繰り返す純朴な田舎者として扱われたうえに、“Clara said, ‘Tell!’ and then she listened like a country girl.”⁵とあるように、他者に教養を請うスタンスが強調されたあたかも無知な女性のように描かれているのである。またHattieの隣人に対する見下した意識とClaraのハイチからの不法移民であるFrederickに向けられた差別的な眼差し、あるいは自分自身は人種差別主義者ではないという弁解に逆説的に表れているように、二人とも、人種差別主義的傾向があるWASPであるという点も共通している。

Bellowは、男性主人公では*Henderson the Rain King*のHendersonを例外的に非ユダヤ人

と設定している。彼はBellowの作品に典型的にみられる内省的な知的探求者ではなく、“I want.”という内なる欲求に突き動かされて、そのままアフリカへ飛び込んでいった行動的な探検者である。この男性ではあるがやはりWASPの主人公であるHendersonと併せて考えると、数少ないヒロインが二人ともWASPという設定になっており、しかも反知性的な女性と設定されている点からは、Bellowが知的なユダヤ人である自分自身とは対極に彼らをおいて描いていることが容易に想像できよう。ヒロインたちは作者の自己投影の対象ではなく、むしろ突き放して客観視する対象なのである。

Cronin氏は、*A Theft*は女性を主人公としているものの“male speaker”の視点から書かれており、“Her romantic ideologies and her gender assessments seem those of a typical male protagonist” (67-8)であり、Claraは、“Male identified female” (69)であると指摘している。しかし男性であるBellowが、自分とは異質な存在であることを意識しながら描いたという点では、“male speaker”の視点から書かれていることには相違ないが、彼女たちはBellowの男性主人公とは正反対の、反知性的であり偏見を免れない女性という特性を担わされているという点において、“a typical male protagonist”というよりもむしろ、やはり典型的なBellowの女性像であると言えよう。IthielもClaraに対して、彼女の倫理的ロジックは、“feminine premises” (94)を考慮すると解けると語っている。またGlenday氏はClaraを、“a creature of feelings more than ideas; natural theologian or metaphysician” (179)と知よりも感情が勝った女性と分析している。

この作品は、これまでのBellowの物語とは異なり知性的男性主人公は影を潜め、その代わりに男性の視点から見てきわめて女性的な、知性よりも感情という反知性的な特質を持ったヒロインが中心となっているのである。

2 古き良き時代のアメリカの喪失

仮にアメリカの古き良き時代を、田舎の信仰心の厚い保守的なWASPが支えていた時代とするならば、それを体現しているのは、ヒロインのClara Veldeであろう。彼女は、「教室が一つしかない学校、保安官、持ち寄りパーティ」が存在する「技術や都会の発展から取り残された」(39-40)田舎町の出身である。プロテスタントの宗教的な環境の下で育てられた「純粹無垢」な心の持ち主であるとされている。彼女は現在ニューヨークに住んでいるが、「インディアナの大都市での生活も、古代エジプトのそのように遠い昔のもの」(10)になったと感じており、彼女にとって故郷は現実的には喪失し既にノスタルジーの世界に属している。古き良きアメリカの代表がClaraの故郷である中西部のインディアナであるならば、その対極にあるのは、宗教心が忘れ去られ犯罪が多発している、言ってみれば、サタンに惑わされて神に敵対した聖書の“Gogmagogsville” (15)であり、Jew Yorkと揶揄されるほどユダヤ人も多く、マイノリティ

がひしめいて生活しているニューヨークであろう。彼女はインディアナからニューヨークに移り住むことによって、単なる地理的変化だけでなく、様々な喪失を体験するのである。

その最たるものは宗教心である。彼女の両親は共に信仰心が厚く、「父は聖公会の教区委員で、母もテレビのファンダメンタリストに小切手を送り続け」(40) であり、その両親の元で、Claraは、「食事ごとに神への感謝の祈りを捧げ、賛美歌を暗唱する」(1) という「旧時代の宗教」に基づいて、「聖書の教えの通りに育てられた」(1) ののである。作品の中で二度にわたって「10世紀の心」の持ち主と記されているように現代では希有の宗教心の持ち主であった。しかしニューヨークに移り住んだ結果どのようになったかと言えば、Clara自身が“*But even to a woman raised on the Bible, which in the city of New York in this day and age is a pretty remote influence, you couldn't call my attachment an evil that rates punishment after death.*” (9) と語り、この時代のニューヨークにあっては、聖書の影響もかなり薄れており、聖書に則って育てられた女性である彼女ですら、たとえ死後罰を受けることになっても、Ithielとの姦淫という聖書の定める大罪に執着してしまうのである。

かつては離婚ですら宗教的にみて罪であり、社会通念状も許されていなかった。ところが現代のアメリカの大都市に生きるClaraは4回、Ithielは3回結婚している上に、ClaraとIthielは姦淫の罪を犯し、その上、それぞれ別に浮気までしている。ここには離婚率40%に上るアメリカの現実があり、生涯一人の相手と添い遂げるという古き良き時代のアメリカの美德の喪失がみられるであろう。Bellow自身がそれを美德の喪失として意識していたかは別としても、Bellow自身も、この作品を書いた時点で、Claraと同じく4回、そして最終的にはClaraを超えて5回にわたる結婚を経験しているのである。

更にClaraが後にしてきた中西部ですら、今では「テレビの福音伝道者達が大金を巻きあげている」(10-11) 墮落の地と化してしまっている。そこの住人である慎み深く礼儀正しい人々に対してClaraは、「子供の時には、息の詰まる思いをしたものだが、今では限りない愛情を抱いている」(11)とあるように古き良き時代の人々の気質を懐かしんでいる。現在では、古き良き時代の伝統を完全に保持している所は、ノスタルジアの世界を除いて、アメリカにはもはやないのである。

離婚やIthielとの姦淫という罪を通してClaraの宗教心は喪失したかに見えるが、実はまだ残っていることが示唆されている箇所がある。

What Clara couldn't say, because Laura Wong's upbringing was so different from her own (and it was her own that seemed the more alien), had to do with Matthew 16:18: “the gates of hell shall not prevail against it” – it being love, against which no door can be closed. This was more of the primitive stuff that Clara had brought from the backcountry and was part of her confused inner life. (48)

Claraは「あなたはペテロである。そして、私はこの岩の上にわたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つことはない(「マタイ伝」16:18) という聖書の言葉を信じている。いかに表面的には宗教心が失われたかに見えても、このClaraが中西部の片田舎から持ってきた原初的な宗教心は彼女にとって根源的なものであり、消して消え去ることなく彼女の内面生活の一部をなすものなのである。Claraは娘であるLucyにも「やせこけて頑固で物静かな彼女自身の人々、さらには彼女自身を見」(11) としてとっている。現代のアメリカで古き良き時代の特質を保持している人は、Claraとその娘であるLucyを除いて誰もいないのである⁶。Lucyはなかなか周囲に溶け込めない難しい子供として描かれているが、この事はLucyやClaraのように特異性を持つ人間が現代のアメリカ社会では生きにくくなっていることを示唆している。

アメリカでは既に表舞台から消えてしまった古き良き時代を体現するもう一人が、中欧の古都であるウィーンからやってきたGinaである。彼女は、申し分のない容姿をした裕福な銀行家の娘である。ニューヨークは「危険な魅力で満ちあふれているというのに、完くもって無知」(11)とClaraが心配するように、かつてのClara同様、旧世界的美德であるイノセンスが残っている。

ClaraはGinaをLucy等娘達の世話をするオー・ペア・ガールとして雇ったのであるが、これから様々な危険と誘惑が待ち受けているニューヨークで生活しようとするGinaを守るために、「経験豊富な人間のあらゆる方策を動員して」(11)、彼女を保護することを決意するのである。これは、Clara自身も有している旧世界的価値観を守るという決意に他ならないであろう。

かつて Henry Jamesは、*Daisy Miller*の中で、純粹無垢なアメリカ娘であるDaisyが、伝統に裏打ちされた重みはあるが、腐敗や墮落もまた抱えている旧世界へ赴き、無垢故に犠牲になっていくというinternational episodeをテーマにした作品を書いた。ClaraはGinaを、ルネッサンス期のイタリアの若い女性もしくは、ロマンティックなスタンダードの小説のヒロインタイプ(93) としているが、むしろDaisyに似ているといえないだろうか。現在では、ヨーロッパよりもアメリカの方が墮落が進んでおり、相対的に純粋な旧世界から来た、若く美しく無垢な娘が、アメリカへやってきて無垢故にトラブルに巻き込まれていくのであり、かつてとは図式が逆になっている。アメリカで喪失した古き良き時代を求めるためには、はるばる中欧の古都まで行かねばならないのである。

3 指輪の喪失

“A Theft” とあるからには、窃盗行為はただ一つFrederickによるClaraの指輪の窃盗だけを差すはずである。それはIthielの単なる「情婦、セックスの相手」(16) ではないこと示す“a symbolic declaration” (16) を望んだClaraが、Ithielにせがんで有名店で買ってもらった最高級のエメラルドの婚約指輪で、言ってみれば指輪はIthielの「降伏」(16) の印だったのである。

この指輪は二度消失し、二度とも取り戻されるのであるが、一度目と二度目では喪失の持つ意味が微妙に変化しているように思われる。

まず一度目の指輪消失は、紛失によるものであった。このとき既にClaraは四番目の夫と結婚し、Ithielも三番目の妻を迎え、「二人の間には七つの結婚が介在する。それにもかかわらず二人は、今なお愛し合っている」(42) のであり、指輪は、「二人を結ぶ^{リング}環」(41) であった。そのリングの喪失にClaraは衝撃を受けるが、Ithielの方は平然と保険金を請求し指輪の喪失にかたをつけるようClaraに促す。それはClaraに対する愛がなくなったからでは決してなく、Claraに対する彼の愛情は、永遠のもの」(42) であり、「時がたつと地平線に昇ってくる月のように、Claraに対する尊敬の念は常に湧き上がってくる」(42) ものであるとIthiel自身も気づいている。結局指輪は一年後に大掃除をしている最中に、Claraによってベッドの下から発見される。彼女は、「この宝石の緑のエッセンス」(43) を吸い込もうとするかのように、指輪を眼前に掲げる。この指輪には、「Ithielの誓約が凍結」(43) しているのであり、「Ithielに対して抱く彼女の情熱が、恒久的な形で固まった」(43) ものである。このようにこの指輪は、夫婦という形では結ばれることがないものの、それ以上の絆で固く結ばれている二人を結ぶ^{リング}環であり、二人の永遠の愛と誓いの象徴なのである。

ClaraもIthielも一度目の指輪喪失によってさほどの衝撃は受けなかった。ところが、二度目の指輪喪失によってClaraは、「生命が真空掃除機で吸い取られてしまったかのような」(68) ショックを受ける。窃盗という明白な形で指輪を喪失して初めて「彼女の精神の安定がすべてその指輪に基づいて」(74) いたことを知ったのである。Ithielとの恋愛の確固たる証拠である指輪の喪失は、Ithielの愛を確信しながらも、「私たちは絶対に夫婦にならない」(79) と考えるに至っているClaraにとって、それゆえ一層大切な結びつきの象徴であり、口先では指輪は、「無くなったのであり、回収は不可能」(77) とさりと言いつつIthielですら、指輪の喪失によって、「二人が夫婦になる機会が永遠に無くなるのではないか」(80) と動揺するのである。

その動揺は指輪がFredericから返却されても回復することはない。指輪が戻った直後、Claraがホールの鏡に映る自分の姿を見る場面があるが、そこに映っていたのは、「痩せて、面長で、頬のあたりも落ちくぼみ、喜びが全く消えているもはや若くない骨張った女性」(85) の姿であった。Clara自身、指輪が戻れば、若返ると考えていたのに、彼女を若返らせるような喜びはわいてこなかったのである。

この二度にわたる指輪の喪失はそれぞれ異なる意味を持っていた。一度目の指輪の紛失は、言うなれば単なる金銭的な損失の問題であったが、二度目の指輪の紛失は二人の関係の喪失と深く結びついている。一回目の時は、ClaraとIthielはまだ若く二人が結婚する可能性も大いに残されていた。しかし二回目の時には、二人の肉体的な老化は無論のこと、指輪の喪失によって二人の結婚の可能性がゼロになると思われるほど、二人の関係は脆弱化していたのである。

実際Claraは、Ithielにふさわしい相手としてうら若きGinaをIthielに差し込もうと考えるが、それは自らの老いと魅力の喪失を意識したClaraが、若さという点以外では自分と同じ美点と特質を備えたGinaを自分の身代わりに仕立てようと試みたと言えよう。

指輪の喪失は、Claraにとって若さ、結婚相手としてのIthiel、そして更に指輪の盗難が契機となってClaraの家を出て、父の決めた結婚のために早々にオーストリアへ帰国するという形でClaraから奪い去られたGinaの喪失を招いたのである⁷。

4 友人の喪失

このnovellaは、語り手によるClaraの人目につく容姿に関する一通りの説明で始められるが、いつのまにか、中国系アメリカ人で、ファッションデザイナーとして有名なLaura Wongに対してClaraが語る形式に変化している。そして物語のかなりの部分をClaraが、「何でも打ち明けられる親友」(4)である、Laura Wongへ語ったこととして読むことができる。彼女はただ、Claraの語りにも無言で耳を傾けることによって、Ithielとの恋愛と情事を中心にClaraのほとんど全てを知る人物であるが、口も堅くClaraに対して異論を唱えることもない、Claraにとって理想の聞き手である。彼女自身も結婚生活を経験し失敗しているが、自分のことは一切語ろうとはしない。今では「夫も子供も欲しいとは思わず」(52)、Claraを尊敬し、好奇心の対象は、ClaraとIthielに向けられていた。

しかし、確かに当初Lauraは純粹にClaraの味方であったが、ClaraからIthielのことを聞かされ続けていくうちにやがて彼女の好奇心はもっぱらIthielのことへと移っていく。その証拠に彼女は、「Ithiel関係の新聞の切り抜きを集め」(52)、「Ithielのテレビインタビューは見逃さない」(53)。その結果LauraのIthielに対する思いが募るのは当然の成り行きといえよう。Claraが二度目にIthielからもらった指輪が出てきたことを喜び勇んでLauraに話した際に、「それじゃTeddy Reglerと最後には一緒になるという希望をずっとあきらめずにいた訳ね」(91)とLauraは語り、その口調の中に、「ClaraとIthielの関係は、終わっているのだから、私がIthielに言い寄ることも可能だ」(91)と考えていたことが明らかになる。Claraは、「一体いつからこの雌犬はIthielをわがものにしようと思っていたのかしら。冗談じゃないわ」(91-2)と、心を許し全てを語ってきた友人の裏切りに腹を立て一番の親友を失ったことを知るものの、全てを聞かせているこの相手を敵に回せば、夫や保険会社と面倒になると考え、「異常なくらい寛大な方策」(92)で対処するしかないと感じる。絶交のように急に関係を絶つことはできないものの、ClaraとLauraの関係はゆるやかに終わりを告げ、Claraはかけがえのない話し相手である女友達を失ったのである。

5 人権の喪失

このnovellaは、WASPのヒロインClaraと、ユダヤ人Ithielの二人を中心に物語が展開していくが、Bellowのこれまでの小説に垣間見られたようなWASPによるユダヤ人差別や反ユダヤ主義の描写はない。しかし国際政治に関心を持つIthielの頭を占めている問題の一つは、人権問題であり、彼は「牢に閉じこめられ、南京虫やシラミに悩まされ、赤痢や肺結核におかされ、結局は幻想状態に陥って死んでいかねばならない人々」(30)の存在について語る。そして人権が踏みにじられているのは、Claraも話題にしたような旧ソ連時代のクレムリンやKGBの本部があるルビヤンカといった特殊な場所だけでないことが示唆される。陪審員の間で厳罰主義が支配的になっていることにも現れているように、「ここ合衆国でも個人の地位は弱まりつつあり、その衰退が逆行することはない」(30)のであり、個人の人権は喪失する方向へと加速度を増している。

このnovellaの中でもっとも悪人として描かれているのは、GinaのボーイフレンドであるFrederick Vigneronであろう。Claraに言わせればIthielが10点中10点満点であるとすれば、Frederickは零点以下であった。彼はハイチ出身で、数年前にフロリダに流れ着いた漂流難民で、浅黒く美貌の持ち主だが、軽犯罪を犯した前歴すらある。現在は東128丁目のハーレムに住んでいる。Ginaが初めて開いたパーティで、Frederickを含めて様々な人種からなるけばけばしい身なりの若者を招き、レゲエで踊り、怪しげな煙を漂わせたことに対して、Claraは、「家に知らない人を連れ込むなんて」(62)と批判する。知らない人と表現しているが、その主眼は貧しいスパニッシュ系の漂流難民という身分や人種にあることは明白であろう。しかしClaraは、自分是人種差別主義者(rashistsと発音している)ではないし、スパニッシュ系の使用人とも親しいと反論する。それでも指輪が喪失した際、Claraは、すぐさまFrederickが犯人であることを確信する。「彼への嫌疑は、皮膚の色が違うからだ」(70)と言いたいのだろうとGinaに問いかけるClaraに対して、Ginaは、「アメリカの人達が、ハイチの人々に意地悪なのは事実」(70)であると反論し、Frederickが犯人と判明した後でさえ、「指輪を目にしたので、何も考えずにポケットに入れてしまったそうです」(101)とFrederickを弁護する。旧世界出身のGinaが最後までFrederickの人権を守ろうとするのに対して、アメリカ人であるClaraにとってラテン系の違法移民であるFrederickは、終始一貫して邪悪な人間の代表であり差別の対象なのである。Frederickは実際に盗みを働いていたので、Claraの偏見といちがいに片付けることはできないが、ここではClaraの首尾一貫した態度を通して、アメリカにおいて人権意識が喪失しつつあることを示唆していると言えよう。

まとめにかえて— エンディングの意味

以上のように男性ヒーローの喪失したこの物語の中では、アメリカからは古き良き時代の特

質や人権意識が喪失し、ヒロインからは指輪の喪失によって、若さが失われIthielや友人が去っていく。最後に全てが喪失した後のエンディングのヒロインに注目してみたいと思う。

Claraは、帰国直前のGinaと指輪喪失の件だけでなく女性として人間としての生き方について話し、お互いを完全な人間と認め合った後町中に出るが、突然涙が溢れてきて止まらなくなる。

But now, when Clara came out of the revolving door, and as soon as she had the pavement under her feet, she started to cry passionately. She hurried, crying, down Madison Avenue, not like a person who belonged there but like one of the homeless, doing grotesque things in public, one of those street people turned loose from an institution. The main source of tears came open. She found a handkerchief and held it to her face in her ringed hand, striding in an awkward hurry. She might have been treading water in New York harbor—it felt that way, more a sea than a pavement, and for all the effort and the emotions that she made, she wasn't getting anywhere, she was still in the same place. 109

涙と水のイメージで終わるこのエンディングは*Seize the Day*のそれを連想させるものである。Glenday氏は、涙には喜びと悲しみの側面、つまりニューヨークにもGinaやLucyのような“complete person”がいたという喜びの側面と、エンディングが、“full of images of estrangement, isolation, and alienation from community” (181)であるように、ニューヨークで人間らしくあろうとすることは難しいことであるという悲しみの側面の両面があると述べている。上記の引用でClaraは、ニューヨークでは居場所のないホームレスや、施設から開放されたばかりの浮浪者のイメージで語られている。このことは、Claraが金銭的には豊かなままであるかもしれないが、それ以上に大切な様々なものを喪失し、ほとんど全てを失った状態にあり、しかも、「完璧な人間」である彼女は、ニューヨークに居場所を見出すことができず彷徨するしかないという、彼女が置かれた状況を象徴的に示すものであろう。

Katherine Anne Porterによって1930年に書かれた“Theft”というほぼ同名の作品がある。ドアに鍵をかけたことがないヒロインは、女性管理人にバックを盗まれる。管理人にバックを返すように要求すると管理人は最初は否認するがやがてバックを返しに来て、17歳の姪にあげるつもりだったという。若く美しい姪には未来があるから、チャンスを切り開くために美しいものを与えられて当然で、バックを姪に与えないヒロインは彼女からそのチャンスを盗んでいくというのである。ヒロインはその言葉を単なる女性管理人の逆恨みと捉えることはできず、所有欲にとりつかれていた自分を顧み、また、管理人の指摘から老いを実感する。その結果、バックは手元に戻ってきたものの、もはや若いとは言えないヒロインは、深い喪失感にとらわれるというストーリーである。

二つの“*Theft*”は共に鍵をかけずに盗まれ、失われたものは戻ってくるがヒロインは逆に喪失感にとらわれるという喪失の物語である。Bellowは*Seize the Day*では、水のイメージを用いながら、主人公の再生を描くことができた。しかし、同じ水のイメージを用いながら*A Theft*で描き得たのは、深い喪失感だけだったのである。古き良き時代の美徳が消失し善人が疎外されるというBellowの時代に対する失望感が、Bellow自身の老いや作家としての名声が失われつつあるという意識と相まって、喪失の物語へと駆り立てたのである。

付記 本稿は、第19回日本ソール・ベロー協会大会シンポジウム(2007年9月14日)における口頭発表原稿に加筆修正を施したものである。

注

- 1 1991年にVikingから出版された、*Something to Remember Me By*の中に、*The Bellarosa Connection*と共にこの*A Theft*も再収録された。
- 2 James Atlas, *Bellow: A Biography*. 542. 以下Atlasと略す。
- 3 Sybil S. Steinberg, "A Conversation with Saul Bellow". 238. 以下CSBと略す。
- 4 Ithielは旧約聖書に登場する名前であり、ヘブライ語で「他より優れたもの」という意味（旧約聖書人名辞典より）がある。この点からClaraという名前にも原意である輝かしいものというニュアンスが内包されているとも考えられる。
- 5 Saul Bellow, *A Theft*. (Penguin Books: New York, 1989), 15.以下この小説からの引用はすべてこの版により、ページ数をカッコ内に示す。
- 6 宗教に限定らず古き良き時代の習慣は廃れつつある。Ithielはユダヤ人ではあるが、鞭で父親に打たれ、叩かれた記憶をもっている。それが、今では児童虐待と呼ばれている事に疑問を呈し、かつての自分と父の関係は、「情熱的に子を殴り、情熱的に父を慕う関係であり、死んだ父親の愛情は少しも変わらない」(30)と語る。ここにもかつて存在した子供の教育には革ベルトや鞭を惜しんではならないというWASP中産階級の厳しい教えや道徳観の喪失が語られているように思われる。
- 7 Claraは、「自分の家なのだから鍵をかける必要がない」として鍵をかける事を拒んできたが、実際これまでは使用人達が入り出してもコーヒースプーン1本すら紛失することはなかった。しかし指輪が、ジーナのボーイフレンドに盗まれたことによって、Claraの抱いてきた安全神話もまた喪失したのである。

引用文献

- Atlas, James. *Bellow: A Biography*. Random House: New York, 2000.
- Bellow, Saul. *A Theft*. Penguin Books: New York, 1989.
- . *Mosby's Memoirs and Other Stories*. Penguin Books: New York, 1971.
- Cronin, Gloria L. *A Room of his Own: In search of feminine in the Novels of Saul Bellow*. Syracuse University Press: New York, 2001.
- Glenday, Michael K. *Saul Bellow and the Decline of Humanism*. Macmillan: London, 1990.
- Pifer, Ellen. *Saul Bellow: Against the Grain*. University of Pennsylvania Press: Philadelphia, 1990.
- Porter, Katherine Anne. *Flowering Judas*. New America Library: New York, 1970.
- Steinberg, Sybil S. "A Conversation with Saul Bellow" Ed. Gloria L. Cronin and Ben Siegel. University Press of Mississippi: Jackson, 1994.
- ジョアン・コメイ 関谷定夫監訳 『旧約聖書人名辞典』 東洋書林 1996.

